
氷の華の咲く場所は

はっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

氷の華の咲く場所

【Nコード】

N1894BA

【作者名】

はっち

【あらすじ】

治癒魔法の魔術師を排出することで名高いリスト家の娘、リヴ・リン・リストは、治癒魔法の力を持っていなかった。リスト本家の娘としての役割を果たせないと悟るリヴは、若くして恋愛も魔術師としての成功の道も閉ざされて、絶望する。

人生捨て鉢な女の子リヴが、型破りな同級生と出会い、心を、人生を大きく揺さぶられて前向きに成長していくストーリー（予定）。現在、大学編。お下品発言が入りますので苦手な方はご注意下さい。

最低の結末

判っていた。多分そうだと判っていたから。早めに判って良かったんだと思わなければいけない。

一つだけはつきりしているのは、全てが終わったということだけだ。

ここはサファイロス帝国の帝国立大学。魔術による軍事力が発達したこの国では、一番のエリート達が帝国大に入学し、卒業と同時にほぼ全員が帝国軍に入隊する。いわば国中のエリートが勢ぞろいする、出世のための登竜門とも言える大学に、この物語の主人公、リヴ・リン・リストも通っていた。

彼女は今、大学一年生の前期が終わったところ。専攻した治癒魔術の教授の部屋に呼ばれ、面談を受けている。

貴族令嬢として英才教育を受けてきた彼女が帝国大に入学したのは、至極普通の流れだが、他の生徒のように成績表を配られて終わりではなく、あえて教授の部屋で面談を受けているのには、彼女には深刻な理由があった。

机の上のリヴ成績表には、可、不可、の文字しか並んでいない。お世辞にも優秀で褒められるために呼ばれたような成績ではなかった。それに加え、先ほど手渡された魔力属性の診断結果が、リヴを絶望の底に叩き落している。

診断表には、火、氷、土、雷、と、沢山の属性が記載されていて、それぞれに対しての向き不向きが書かれている。リヴが一番最初に目にした、治癒、の欄には、見まごうことないくらい完結に「素養

無し」の4文字が踊っていた。

机の向こう側で向き合って座る面談相手の教授が、すまなそうな顔でリヴに声をかけた。

「貴女の家事情もわかります、辛いお気持ちなのも判るのですけれど、例えば水魔法の…」

「有難うございます。」

教授の声をさえぎって、リヴは顔をあげた。にこり、と優雅な微笑を浮かべる。その微笑が悲痛だったことに教授は気づいたのだろう。黙ってリヴの言に耳を傾けてくれた。

「素養がないのであれば、これ以上無理に治癒魔術を専攻させて頂いても無駄ではないかと思えます。…まずは父にこの結果を報告して、専攻をどうするかについては、また…」

気丈に話そうとするリヴの声が、喉につかえた。リヴは涙が出そうになるのを必死に堪える。最後まで言い切れなかったリヴを察した教授が、にこりと優しい微笑をリヴに向けた。

「ええ、そうなさい。一年生の後期が始まるまでには時間があるし、ゆっくりご家族と相談して決断すれば良いわ。」

治癒魔術師の一族の嫡流、本家の娘として生まれたリヴは、今まで治癒魔術の英才教育を受けてきている。なので帝国大に入る前から、治癒魔術がどうやら使えないようだということは判っていた。それでも厳しい父の言いつけにより、入学時に専攻を治癒魔術として半年間過ごしてきたが、やはり教授の目から見ても「違うのではない

か？」というのは明らかかなようだった。

リスト家特有の容姿である淡い水色の髪と瞳を持つリヴは、その容姿もあって同級生たちの間では格好の噂の的だった。その容姿を持つ者はつまり、リスト家一族の者、イコール優秀なヒーラーと見た目で判断出来るので、最初はこぞって皆近づいてきた。

それが、実技でほぼ0点を取るリヴを見、影で言われているあだ名が「偽リスト」。何とも不名誉で、リヴの最も傷つくあだ名だった。

教授が連絡先の書かれた名刺をリヴに手渡し、いつでも連絡しなさいと言った。リヴは立ち上がって、有難うございますと感謝の言葉を述べ、優雅に頭を下げる。

失礼しますと言って教授の部屋を出ようとしたところで、リヴよりも先に扉がカチャリと開き、誰かが顔を突き入れてきた。

「おわっ！　…と、失礼。学生が来てたのか。」

「まあ、ケイン教授。」

リヴの教授が言ったケイン、という名は知っていた。接近戦の実技を担当している人物。教え方が上手いと生徒に評判の教授だ。リヴが入学するよりも先にこの帝国大を卒業している姉が、優秀な方だと褒めていたこともある。

リヴは後衛、治癒魔術の講義しか取っていなかったもので、前衛の講義を担当する彼の顔を見たのはこれが初めてだった。きょとんとして、リヴよりも頭数個分上にあるその顔を見上げる。

「うちの生徒のペア決めでちょっと相談ごとがあっってきたんだけど。そっちのヒーラーで…」

リヴのことなど目に入らないかの様子で、ケインは砕けた口調でリヴの教授に仕事の話を始めた。自分は邪魔になるだろうと感じ、リヴはぺこりと頭を下げ「失礼いたします。」と挨拶すると、するりと扉の隙間から部屋を出た。

カツカツと踵の音を立てて早足に廊下を歩き、建物から出る。空は嫌味のように晴れ渡っており、はじまりかけの夏の日差しがリヴの白い肌に暑く降り注いだ。

（終わった。全て終わってしまった。）

気温と反対に、リヴの心は冷たく沈む。

リヴの足は慣れた道のりを進み、リヴの家へと向かう。真っ直ぐ帰りたくないのに、令嬢として育てられたリヴは、寄り道して気晴らしが出来る場所など知らない。

父との確執

帝国軍にて優秀な治癒魔術師、つまりヒーラーを輩出する名家、リスト家。

その嫡流として生まれ、数々の英才教育を受けたリヴ・リン・リストに、ヒーラーの素養なし。

この最低の結末を父や姉に伝えるにあたり、リヴには心強い味方が居た。リヴの家庭教師である遠縁の伯母、エスメロードである。

硬い表情で屋敷に戻り、まっすぐ自室に向かったリヴの元へ、使用人からリヴの帰宅を聞いたエスメロードが真剣な眼差しで向かってきた。二人は目と目で会話をする、静かに部屋に入る。

「リヴ様、……結果をお聞かせ頂けますか？」

リヴの冷たく冷え切った心を暖めるような表情で、エスメロードが優しく囁く。リヴは、おずおずと成績表と診断結果を取り出し、エスメロードに手渡す。彼女がこくりと頷いて紙を開いたところで、堪えていた涙が溢れた。

「わたくし、だめだったわ……。わかってはいたのけれど、でも、……！」

喉の奥が引きつって、最後まで声にならなかった。エスメロードは紙から目を外し、リヴの両目を見つめてから、ぎゅっと抱きしめてくれた。

「リヴ様、ああ、リヴ様、何という……！」

エスメロードの胸に顔を押し付け、リヴは嗚咽を漏らした。

「悔しい、悔しいわ先生！ わたくし、わたくしは、やっぱり出来損ないでしたの！ ヒーラーにはなれない、リスト家の役割を果たせない！」

抑えていた気持ちを一気に溢れさせるリヴを、エスメロードが抱きしめ、全てを受け止めてくれる。

リヴの診断結果、「治癒魔術の素養無し」というのは、どんなに努力しても治癒魔術は使えないと確定したという意味である。それは、治癒魔術の名門であるリスト家嫡流としては信じられない現実であった。

「リヴ様、ご当主様を、お父上を信頼なさいませ。この結果を見てまでも、ヒーラーになれとなど仰られませんかでしょう。リヴ様はご当主様の可愛い娘でございます。きっと、他の属性に専攻を変えれば良いと仰いますわ。」

「そう…かしら。」

厳格な父の顔がリヴの脳裏に蘇る。今まで治癒魔術の練習をいくらしても結果が出なかったリヴに対し、父はずっと「素養があるのに努力を怠っている」という評価を下し、激しく叱咤をする。

リヴだって努力はしてきた。エスメロードに習い治癒魔術の知識をつけてきた。彼女のおかげで、座学ならリヴはエリート揃いの帝国大でもトップだった。そして今回、教授の勧めで魔術属性の診断を受け、結果が「治癒魔術の素養無し」だ。

ここに関してはもう、努力でカバーできる部分ではないのだから、父も判ってくれるだろう。

少し気を持ち直したリヴに、エスメロードが強く頷いてみせる。

「まずはわたくしから、父上にお話して参ります。」
エスメロードの強く優しい眼差しに、リヴは心底救われた。ほっとエスメロードにしなだれかかり、ありがとう先生、と呟く。エスメロードが懷から柔らかなハンカチを取り出し、涙に濡れるリヴの頬に優しく押し当てた。

エスメロードが出て行ってからどのくらい経っただろうか。リヴの部屋に、当主である父の執事で、リスト家の家令がやってきた。

「リヴお嬢様、ご当主様がお呼びです。書斎までお越し下さい。」
静かな口調でそう語る家令がリヴは少し苦手だ。幼い頃遊んで貰ったことはあるが、魔術の練習が始まったころからは父と同じく、厳しい視線を向けてくるような気がしている。

「…わかったわ。先生は？」

「一緒に書斎におられます。」

リヴはすっと立ち上がる。こうして呼ばれることは予想していたので、泣いてしまって崩れた化粧も直し終わっている。

家令を伴い、父の書斎まではすぐに着いた。緊張を隠すようにノックをする。

「お父様、リヴでございますわ。」

腹に力を入れてそう声をかけると、父の声が「入れ」と返事をした。

父の部屋は、ドアを開いた正面に、大きな窓を背に執務机が構えている。

その前に向かい合ったソファとセンターテーブル。

父は執務机の向こうで、赤くなりかけた空を眺めていた。表情は見えない。エスメロードはソファのひとつに腰をかけ、青白い顔で俯いている。

「リヴ。」

父の低い声に身を震わせながらも、リヴははい、と乾いた返事を返した。ふいに、父の執務机の上に、さきほどエスメロードに渡した成績表と診断結果があることに気づく。成績表は開かれていて、昼間にリヴも見ただけ、可、不可の羅列が見て取れた。

緊張でドアの前に立ったまま動かないリヴを、家令が奥へと促した。ゆっくりと重い足取りで父の近くまで近寄る。あの診断結果を見れば、リヴが努力してもヒーラーになれないと判っているはずだ。

ごくり、と唾を飲み込んで執務机の前に立ったリヴに、父はゆっくりと振り向いた。その視線に、リヴの全身は氷に包まれたかのごとく冷え切った。

父の目は、怒りに燃えていたのだ。

「お前は、リスト家の恥だ。」

父の言葉が氷の槍のようにリヴの心に突き刺さった。驚きと恐怖で目を皿のように開く。

「私はリスト家の当主で、お前はその嫡流である。」

父は冷たい視線でリヴを、汚いものを見るかのように睨みつけた。

「嫡流は、リスト家の模範としての行動を常に意識しておらねばならない。お前が何を求められているのか、答えてみろ！」

静かだが激しい怒りを含んだ口調に、リヴの膝が震えた。絶望と恐怖で、喉がカラカラに渴く。浅く何度も呼吸をしながら、リヴはやつつのことで声を出した。

「：リスト家は、強力なヒーラーを輩出する帝国の名家です。治癒魔術は軍のみにあらず、市井でも重宝される貴重な魔術です。わたくしはリスト家の嫡流の娘として、優秀なヒーラーとして帝国軍に仕え、戦果を上げなければいけません。」

生まれてこのかた刷り込まれてきた、リスト家嫡流の役割を、リヴは流れるように答えた。父は冷たく睨みつけたままだ。リヴは続ける。

「私は長子ではございませんので、いつかリスト家を出て嫁に行きます。優秀なヒーラーとなり良き伴侶を得、リスト家一族の繁栄に外から貢献することが、わたくしの役割と存じます。」

言いながらリヴは悔しさと悲しさで、喉を震わせた。両目からは勝手に熱い涙が零れ落ち、せっかく化粧を直した頬を濡らしていく。言い終わったりヴを、父はギロリと射殺するように睨み付けた。

「この出来損ないの頭でっかちが。そこまでつらつらと答えておきながら、なぜそれが行動できぬのだ！二度とこのようなものを私の目に入れるな！」

父はリヴの成績表と診断結果の紙を掴むと、腕を振り上げて乱暴に床に叩きつけた。紙で出来た軽いそれは、ぱしんと乾いた音をたてて床へと当たる。

それを目で追いながら、リヴは、ううっと嗚咽を漏らす。

「しかし、しかしお父様、その診断結果によればわたくしは……」
「出て行け！」

リヴの言葉を遮った父は鬼のような剣幕で腕を振り、扉を指差す。

「当分、お前の顔など見たくもない！ この恥晒しめ！」

言葉を失って立ち尽くすリヴを、エスメロードが後ろから支え、さあと小さく囁く。彼女に連れられて父の書斎を出たリヴは、怒りとも悲しみとも何とも言いがたい感情が渦巻き、言葉を出すことも足を踏み出すことも出来なかった。

エスメロードが侍女を呼んで、リヴは両側を支えられるようにして自室に戻った。

自室の扉を閉じると、エスメロードが青白い顔で、リヴの顔を覗き込む。

「リヴ様、お父上様は混乱しておいでなのです。ご当主として厳しい方故、あのようなことを仰ったのでしょう。しかしいつかきっと判って下さいますわ。わたくしがずっと付いております。わたくしはいつも、リヴ様のお味方です。」

「エスメロ……ド……！」

リヴはエスメロードの胸に飛び込んで、わあわあと声をあげて泣いた。

どうしたら良いのかも判らない。今までの必死の努力、治癒魔術の素養がないこと、父の激高。

怒ったら良いのだろうか。それとも、悲しんだら良いのだろうか。

リヴは自分の気持ちを全くコントロール出来なかった。

何か行動を起こさなければいけないということは判るものの、何をしたら良いのか、どういう方向を向けば良いのか判らなかった。

泣きつかれて眠りについたリヴの頬を、エスメロードが優しく撫でた。

父との確執（後書き）

嫡流＝本家筋、という意味で使用します。

主人公は男でも長女でもないのですが、本家筋の娘として重責を担わなければいけない、という教育方針です。

リトルガーデン

あれから二日間、リヴは自室に籠もって過ごしていた。

考えども考えども、自分がこれからどうしたら良いのか、答えどころか方向性も見出せないでいた。

三日目の朝。ふと外を見ると、庭師たちがせっせと腐葉土を運んでいる姿が見えた。

「そういえば…」

リヴはふと、庭の一角に設けて貰った、自分の薔薇園を思い出す。薔薇はリヴの唯一の趣味で、他人に誇れる得意なことだった。

そろそろ暑さも増してきたし、自分の薔薇園も夏用の手入れが必要な時期になってきている。

リヴは手早く身支度をした。化粧はせず、髪だけさっとハーフアップにくくり、レースの部屋着から汚れても良い庭弄り用のズボンとシャツに着替え、エプロンを身に着ける。およそ貴族令嬢とは思えない服装だ。

1階に設けられたリヴの部屋からは、そのまま庭へと出られるようになっているので、クローゼットからモスグリーンの長靴を取り出すと、ベランダの窓を開けた。途端に部屋の中から飼猫のチャコが風のように飛び出す。庭の向こうからバウバウと吼えながら番犬のジェニファーが駆けてきて、子猫と大型犬が仲良くじゃれ合い出す。

（ずっと外に出てなかったから、チャコちゃんも寂しかったのかな
…）

その様子を見て、リヴは目を細めた。

リスト家の庭は広大で、何人もの庭師が働いている。

リヴはベランダの隅においてあったバケツとスコップを手に取ると、庭の隅にある一角でバケツの中に藁を入れる。そのまま、手入れされた芝生の上を、さく、さく、と音を立てながら歩き、植え込みに囲われた小さな薔薇園へとやってきた。

そこはリヴが好きなように薔薇を育てている薔薇園だった。ひとりの庭師がリヴの姿を見つけ、立ち上がってぺこりと頭を下げる。

「お嬢さん、体調を崩されたって聞きましたけど、もう大丈夫なんですか？」

「ありがとうございます。うん、もう大丈夫よ。薔薇が気になって来ちゃったの。」

「そりゃあ、良かった。薔薇たちも、お嬢さんが来てくれねえってへろへろで。」

ロイという名の青年は、汗の浮いた額をぬぐいながらニカリと笑った。もう30になるうかというその青年庭師は、リヴの薔薇園を預かってくれている。彼の親の代から庭師としてリスト家に仕えてくれており、父からの信頼も厚い好青年だ。

「おおーい、お前たち。お嬢さんから勉強させてもらえよー。」
ロイの声に、歳若い庭師たちが近づいてきて、リヴの手元を見つめる。

「根元のあたりに藁をかぶせて、暑さから守るのよ。」

リヴは持ってきた藁を、一本の薔薇の根元に敷いた。若い庭師たちはその様子を見つめながら、なるほど、などと声をあげた。

「俺、もっと藁取ってきましようか？」

ひとりがリヴに問いかけたので、リヴは周りを見回してからニコリ

と笑った。

「あの腐葉土でも代用できるから大丈夫よ。やってみて。」

「わかりました!」

リヴの手をまねて、他の庭師たちも薔薇の根元に藁や腐葉土を敷き始めた。

「私は剪定をしようかな。」

エプロンの前ポケットから選定用バサミを取り出すと、リヴは手際よくパチンパチンと古い枝を落とす。

何かに夢中になっている間は、憂鬱な気持ちは忘れることが出来る。リヴは一心不乱に薔薇を扱って、額の汗をぬぐう。リヴのためにロイがパラソルを持ってきてくれて、白い肌が日に焼けないよう日陰を作ってくれた。

「額に汗するリヴお嬢様、綺麗だよなあ。」

「お優しくて気さくで、それでいて高貴で…。まるで薔薇のようだな。」

「ぷっ。お前中々詩人だな!」

「いや、でも思わねえ? あのリスト家特有の淡い水色の瞳と髪。あの色の薔薇があったら…」

「…あったら綺麗だろうな。」

「あんなお嬢様、他のどの貴族の家にも居ないだろうよ。」

「でも大学で上手くいってないらしくて。」

「聞いた。先日ご当主様がお怒りになったとか。」

「…お嬢様、おかわいそうに。」

リヴを心酔している若い庭師たちが、遠巻きにそんな会話をしていることなど、当のリヴは知る由もなかった。

「おいお前ら！　口じゃなくて手え動かせ！」
「へ、へい！」

彼らを叱り付けるロイもまた、優しい眼差しで薔薇を見つめるリヴに視線を送ると、ふっと笑顔になったのだった。

リトルガーデン（後書き）

植物についてはど素人ですので、間違い等ありましたらすみません。

ケイン教授と講義

薔薇の手入れが終わり、リヴは軽く湯を浴びる。

侍女が持ってきてくれた遅くて軽めの朝食をお腹に収めると、リヴは身支度を始めた。薔薇の手入れで少しだけ気持ち前向きになった気がする。家に居ても気持ちは塞ぐ一方なのだから、外に出てやろうと思った。

「リヴ様、どちらに行かれるのです？」

エスメロードがやってきて、心配そうにリヴに声をかけてきた。リヴはバッグを持つと、にこりと微笑んで彼女を見た。

「大学よ。一人でうじうじ考えていても、答えなんて出そうにないもの。何かヒントが欲しいの。」

心配そうなエスメロードに大丈夫、と念を押すと、リヴはコツコツとヒールの音を鳴らして足早に廊下を進んだ。丁度玄関の近くで出かけようとしている父に出くわした。リヴは父を睨みつけるように目を細めて、ねちっこい声を出す。

「ごきげんよう、お父様。」

どこへ行くとも何をするとも一切を語らず、ぷいっと隣を通り抜けて家を出る。父が何か言いたそうな視線を送ってきたが、それに答えることも目をあわせることもせず、カツカツと石畳の上を駆けて、リヴは門を出た。

（気晴らしが大学しかないっていうのが、いかに寂しい人生かってことを体言してるみたいで、嫌だわ。）

心の中で愚痴を零しながら、帝国大のキャンパスを歩く。まだ講義やテストの残っている学生たちがワイワイと話しながら横を通り過

ぎていく。本当は、マルシェで寄り道して買い食いしてみたりしたいのだが、お嬢様育ちのリヴには敷居が高い行為だった。同じ貴族令嬢の友人と気晴らしするとしたら、たいていどこかの屋敷でお茶会になつてしまうので、そういった付き合いに誘える人物も居ない。

「あれ？ 君は確か。」

突如声をかけられて振り返ると、先日、リヴの教授の部屋で偶然出くわしたケイン教授が立っていた。身軽な服装で、時間的に今から自分の講義に向かうところか何かだろう。

「ごきげんよう、ケイン教授。一年のリヴ・リン・リストです。」
ぺこり、と礼をすると、彼はリヴの頭のとっぺんからつま先までじろじろ見て、ふーん、とか、ほーとか、声をあげていた。

「あの、わたくしが何か？」

「よし、君、今から俺の講義を見学しに来なさい。」
にかつと笑顔で、突然そんなことを言われ、リヴは目を大きく開いた。

「えっ？」

「いやあ、今からウチの一年の実技テストなんだけどさ、全員男でむさいったら無いんだわ。可愛い女子が見学したら俺も奴らもやる気出るだろ？ ってことで、協力してよ！」

「ええ？」

動揺するリヴを一切気にせず、ケイン教授はニコニコと笑ってリヴを連れて行く。強引さに驚きながらも、リヴはその場の空気に流されて、テストが行われる練習場まで来てしまった。

「ほい、これ。」

「は？」

状況についていけないリヴは、強引に、紙束をクリップで留めたも

のとペンを手に持たされていた。

「こ、これは一体何、ですか？」

「ただ座ってるのも退屈だろうし、俺の助手ってことで手伝ってよ。」

「はあ…」

ぱらりと紙をめくると、テストを受ける学生の氏名と魔法属性などが紙の上半分に纏められている。下半分は、攻撃力、機動性、機転などの近接に関わる項目だけが記載されており、白紙のチェックシートのようになっていた。

「俺が見て上から点数を言うから。」

「…承知しました。書記をしろということですね？」

リヴは状況を察して、こくりと頷く。チェックシートは良くできていて、数字を書けば良いだけになっていたので、リヴでも簡単に出来るだろう。頷いたリヴを、ケイン教授がちらりと見て微笑んだ。

「察しが良くて助かるよ。さて、そろそろあいづらが来るぞ。」

その言葉にあわせたかのように、練習場の入り口がガヤガヤと騒がしくなり、練習着に身を包んだ男子生徒たちがなだれ込んできた。

「うっしやあー、やったるぜえ！」

「ヒヤハ！ お前を伸してやるからな！」

「お前こそ！」

ギャハハハハ、と下品な笑い声をあげながら、体格の良い男達が入ってくる。人数は10人程だ。ケイン教授の講義を取る一年生たち。つまりリヴと同級生の、前衛たちだ。王子様面した貴族男子としか接点の無いリヴは、そのあまりな様子に眉をぴくりと引きつらせた。

「今年のウチの学生は好戦的なのが集まってなあ。完全アタッカ―希望者ばかりだから、華の年代になりそうなんだ。…まあ、全員男だから華は無いけど。」

ケイン教授が苦笑いしながら学生達の様子を見る。彼らは練習場に

入るや否や、自習とばかりに手合わせを始めていた。

中でも最も背の高く体格の良い赤毛の男が、全員のリーダー格、いやボス、という方がぴったりだろう。子分のように皆を従えて、大きな声で笑いながら仲間と手合わせをしている。

（ああいうタイプの人って、あまり悩みなんてなさそう。羨ましいわ……。）

ぼんやりと彼を眺めながら、リヴはふうっとため息をついた。

アタッカーとは、アタック、つまり攻撃的行為を主に担う兵のことである。

通常の兵は皆基本的に、剣や魔術などの攻撃手段を持っているが、アタッカーと呼ばれる兵たちの攻撃力はずば抜けている。ただの近接、前衛とは格が違う。防御魔法や回復、陽動魔法などは他の兵に任せて、とにかく相手へ与えるダメージを大きくすることに重きを置いている。戦いの最前線に身を置き、危険を顧みず戦う。この国の名だたる英雄達も、大体がこのアタッカー。彼らは戦場の花形なのだ。

治癒魔法を主とするリスト家の人間とは、対極をなす存在である。

「……………」

奇声を上げながら楽しそうに手合わせをする粗暴な男達を見て、リヴは引いていた。リスト家と対極という以前に、リヴとは対極の人種である。何というか、不良、というのに近い気がする。

「ははは、ご令嬢の君には驚く光景でしょう？　これが戦場の花形、アタッカー。リスト家のヒーラーがペアを組みたがる…ね。」

その言葉にはっとして顔をあげると、ケインは人の良さそうな笑み

を浮かべてから、学生たちに声をかける。

「ウェスパー！ そんなへっぴり腰で戦場に立っても一瞬であの世行きだぞ！ リード、お前は左側に隙があるって言ったのに全然直ってねえな！」

優男面したケインがドスの効いた声をあげたので、リヴはさらに目を丸くする。ケインに声をかけられた学生が視線を持ってきて、はた、とりヴに目を留めた。

戦場の花形

リヴを見つけた男子学生が視線をリヴに絡めた後、大きな声をあげた。

「おあ？ お、お、女がいる！」

その言葉にチャンバラ状態だった他の学生たちも手を止め、視線を泳がせてリヴを見つけた。

「え？ まじ？」

「うわ、まじ！ まじでいる！」

「ちょ、まて可愛くね？」

「何、何ナニ？ 何で？ どういうこと？」

男達の視線が暑苦しくリヴに絡みつく。

（うわ、やだ、ちょっと何！？）

初めての経験に、リヴは背筋がぞわりと粟立った。お腹をすかせた肉食獣の群れの中に放り込まれた兎のような気分だ。ケインが説明をしようと、あーと声を発した時だった。

「ケイン教授！」

一番背が高くて体格の良い、あの赤毛の男がぴっと手を上げた。

「何だ、ケル・ロア。」

ケインが彼の名を呼ぶ。ケル・ロア。リヴは頭の中で先ほど見た紙束の、彼のページを思い出す。土魔法と植物魔法が得意、超好戦的、攻撃方法は体術。書かれていた情報が頭の中をよぎる。

ケル・ロアはちらりとリヴに視線をよこした後、にかつと人の良さそうな笑いを浮かべた後、とんでもないことを言った。

「そこに居る女子はご褒美ですか？ 俺が一番の成績だったら喰っていい？」

「はっ、はぁーっ！？」

リヴは驚いて立ち上がった。ばさばさと音を立てて膝の上に乗せていた紙束が地面に落ちる。

（な、何を言ったの？ この男、いったい、今、何を言いましたの！！）

全身の血が頭に上ってくるようだ。顔は真っ赤になっているに違いない。

その男、ケル・ロアの発言を聞いていた学生たちが、どっと大笑いした。ケル・ロア本人は相変わらずニカリと笑顔を浮かべている。

「ケルさん、やめろって！」

「女の子真っ赤になっちゃってる！ かわいいー！」

「センセー、俺も喰いたいッス！」

リヴを放置してやいのやいのと盛り上がる男達に、ケインがはぁーっとため息をついた。

「お前達、こちらはリヴ・リン・リストさん。リスト家のご令嬢だぞ。そんな方を飢えた野獣みたいなお前らのご褒美にするわけねーだろ！ 今日助手をお願いして来てもらったんだ！ 手え出すなよ！」

このバカ者どもが！と怒鳴るケインに、学生達はまたどつと笑う。
と。ある一人がリヴの顔をみて、あつと言った。

「リスト家のご令嬢って、この子が噂の偽リスト!？」

途端に笑い声がやみ、その場がしん：と静まり返った。偽リスト、
と影で言われていることくらい承知していたリヴは、ぐっと唇を引
き結び俯いた。

ヒーラーの一族なのにヒーラーじゃない、偽者のリスト一族のリヴ
に偽リストという、自分にぴったりで滑稽なあだ名。言い返したい
が言い返せない。

静まり返ったその場で、皆の視線がリヴに集まった。何も言い返せ
ないリヴを見て、それが肯定の意だと悟ったのだろう。何とも気ま
ずい空気が広がる。

静まったその場に、ガツツという鈍い音が響いた。驚いてリヴが顔
を上げると、先ほど偽リストとのたまった学生が頭を抑えて蹲って
おり、その隣で涼しい表情のケル・ロア。

何が起こったのか見ていなかったリヴは、きょんととしてその光景を
見つめた。

ケル・ロアは涼しい表情で

「ケイン教授、もう始めようぜ。俺、うずうずして間違えて隣の奴
殴っちまったみたい。」

と言って、わざと痛そうに、右手の拳を開いてヒラヒラと振って見
せた。その様子に、静まり返っていた学生達が、再びどつと笑う。
ケインもその様子に苦笑しながら、じゃあ始めるか、と答え、悪戯
っぽく笑う。

「成績が一番悪かった奴には、ご褒美に俺のキスをやろう！」
学生達がげええと声を出す。ある者など、本当に吐いているかの
ように、背中を丸めてオエエと舌を出してみせている。その背中

を撫でて介抱する者、もらいゲロのふりをする者までいる。

リヴは、目の前に広がる自分の全く知らない世界に、驚いて目を丸くすることしか出来なかった。下品で、粗暴で、それなのにちよつと優しい。お調子者がいっぱいいて、お馬鹿なのに見ていると何だか元気になるというか…。

そんな彼らが、戦場の最前線で戦うアタッカー。

命を燃やし戦う、戦場の花形なのだ。

新世界への誘い

ケイン教授の実技テストは、壮絶だった。

武器は切っ先や歯を潰してあるとはいえ、一歩間違えば大怪我を負う可能性があるような激しい模擬戦闘が、リヴの前で繰り広げられている。

先ほどまでお馬鹿でお調子者だという印象だった彼らは、先ほど同様、ホウ！とかヒャハー！とか、奇声を上げながら武器を振るっていたが、もうお調子者の気配は一切無い。あるのは命のやり取りをしながら、戦闘に楽しみすら感じているのではないかと思うほどの迫力。

「ウェスパ1、4、3、4、2、4、5。」

「4、3、4、2、4、5。」

リヴはその殺気に押されながら、必死にケイン教授が言う点数を復唱し、書きとめていく。

「おーし、いいぞ。次。」

次に出てきた人物を見て、リヴは少しだけ緊張する。

体格の良い赤毛の男。ケル・ロアと、偽リストとのたまったあの学生だ。

はじめ、の声と共に、学生がケル・ロアに向かって切りかかった。

「デヤァァ！」

「うお、お前気合入ってんな！」

ひよい、と軽々ケル・ロアが避け、左手を素早く動かした。何の動きか、トリヴが疑問に思ったときには、学生の足がツルに絡め取られて転倒していた。

（植物魔法、ですわね。）

ケル・ロアがあまりに簡単に扱ったので、リヴは目を丸くする。詠唱も一瞬だったし、ただ見学している自分が理解できなかったのだから、実際対峙している相手はもっと驚いただろう。

「ッラアア！」

学生は、足のツルを強引に剣で切り自由の身となると、再び剣を構えてケル・ロアに向かう。大きく振りかぶってぶんと振られたその剣を、ケル・ロアが身を屈めて避けた。切っ先に掠められた赤毛が、パラパラと宙を舞う。

「ん？」

ケイン教授が小さく唸った。リヴは目の前の戦闘に夢中で、その意味に気づかない。

「…。俺お前みたいな奴嫌いだわ。」

ケル・ロアが小さく舌打ちをする。

「うるさい！ 俺だってお前みたいな奴！」

学生が剣を前に構え、突き指すようにして走りこんでくる。ケル・ロアがバックステップをしながら、パンと両手を合わせた。学生は、ケル・ロアの体に向かって剣を突き出しながらさらに走る。

「ばあか！ 後ろは壁だ！ 串刺しになれ！」

「バカはお前だろ。」

壁に背をつけた瞬間、合わせた手を前に開く。開いたと同時に練習場中に熱気が走り、その熱気の衝撃によって飛び込んできた学生が吹き飛んだ。

「しょ、衝撃、派？」

リヴは驚いて声をあげた。

拳の風圧で蝋燭の火を消すとかいう、あれのすごいバージョンだ。あの赤毛の男、みんなのボス格だけあって、実力も相当らしい。

「そこまで！」

ケイン教授が合図をしたと同時に、吹き飛んで倒れた学生の元へ走り寄る。治療が必要なのだとふんだリヴは、足元に置かれていた救急箱に手を伸ばして立ち上がろうとし、ぴたりと動きを止めた。

ケイン教授は倒れた学生を放置し、打ち捨てられた剣を見ていた。

「あー、やっぱりね。この剣、歯潰してないな。」

地面に衝突した衝撃で脳震盪を起こしている学生を見下ろして、ケインは憎憎しげに言った。

「お前、相手がケルじゃなかったら大惨事だぞ。帝国大の俺の講義でナメた真似しやがって。単位はもちろんやらない。そして停学処分な。」

冷たく言い放って転がる剣を鞘に収めると、固まっているリヴにおおいと声をかけた。

「ケルの手が怪我してると思うから、治療してやってくれー！」

治療、と言われ一瞬ピクリと肩を震わせたリヴだったが、思い直して救急箱を手にとると、たっと一目散にケル・ロアの元へ走る。

衝撃派を放った状態そのまま、後ろの壁に背をつけたままのケル・ロアは、駆け寄ってきたリヴを見てニカリと笑った。

「うわ、なに、お嬢様やらせてくれんの？」

「貴方って人は！」

睨みつけてから、ケルの体の様子を見る。壁にもたれた背中は無事。

体にも剣での切り傷はない。両手の平が焼けただれている。

「自分の衝撃派で焼けどするなんて！ 手を出しなさいな！」

おとなしく掌を上に向けて差し出したケルに向かって、リヴは右手を差し出し、口の中で小さく詠唱をした。するとリヴの右手から、雪のように細かな氷が舞い出でて、焼け爛れたケルの両手に降り注ぐ。最初は小さく出し、次第に吹雪のように威力を増して患部を冷やす。

右手で詠唱を続けながら、リヴは救急箱から軟膏を取り出した。リヴの水魔法によって冷やされた患部に、軟膏を塗っていく。包帯を取り出してその上に巻きつける。

「まだ、熱いかしら？」

「ああ、またジンジンしてきた。」

「じゃあこれを。」

リヴが両手を向かい合わせると、手と手の間にキラリと氷のつぶが生まれた。それは徐々に大きさを増し、赤子の頭くらいの大きさとなる。その氷をさっとガーゼに包んでケルに持たせる。

「きもちいいー…。」

「この状態で、すぐに医務室に行くのよ。この程度の傷なら、ヒーラーに治癒してもらえば一瞬で治るわ。」

余ったガーゼやハサミを救急箱にしまいながら、ヒーラーでない自分をリヴは悔やむ。こういうとき、父や姉だったら一瞬で怪我を治療出来るのに。

そんな風に苦悩するリヴの眉間が、突然何かに突かれた。

「しわ。」

「はっ？」

驚いて意識を戻すと、リヴの眉間に、包帯まみれのケルの指。

「なな、な、何をなさって…?」

「いやだからさ、しわ。眉間にしわよってるぞ?」

「!!」

リヴはざっと後ずさりし、自分の眉間を抑える。

「ととと年頃の乙女にしわ、だなんて…! 貴方ってなんて失礼な人なの!」

「ぷっ」

狼狽するリヴに、ケルは噴出して笑った。

「お前、へんな奴。」

「ななな、なんですって!」

「治療、サンキュー。医務室に行って来るわ。」

リヴの怒りなどお構いなしに、その失礼な男は立ち上がってニコニコと歩き出す。リヴの出した氷を大事そうに抱えながら。

「そうそう、お前さあ。」

途中で足を止めると、ケルは振り向いてリヴに言った。

「お前、氷魔法ほぼ無詠唱じゃん。アタッカーになれよ。」
「!」

驚きで押し黙るリヴを置いて、その男、ケル・ロアは颯爽と練習場を横切って出口へ向かう。ケイン教授がリヴに叫んだ。

「悪いが医務室まで付き添ってくれ。後の奴のテストが終わったら俺も行くから。」

「わ、わかりました。」

方向性がわからないとか、どうしたら良いかわからないとか。

そんな悩みを持っていたことなど忘れて、リヴは夢中で彼の背中を追った。

失礼な奴

医務室に向かうと、すぐに常駐しているヒーラーが出てきて、ケルの手の包帯を解いた。その常駐ヒーラーはケルに、治癒魔術が使える人間が近くに居なかったのは不幸だったけれど、この初期手当てはベストだ、彼女が居て、貴方運がよかったわね、と言った。

「あの…」

「なに？」

ものの1分で治療が完了したので、ケイン教授が来るのを待つこともないということになり、二人は医務室から練習場へ戻る途中である。

「…ごめんなさい。」

「は？」

リヴに唐突に謝られたケルは、ぴたりと足を止めてリヴに視線をよこした。背の高い彼から見られると、自然に見下ろされる形になる。

「何で謝るんだよ。」

「だって…、私、本当に偽リストですもの。私が治癒魔術が使えたら、その場で治せたわ。だから、ごめんなさい。」

「……。」

リヴの言葉に、ケルは押し黙った。リヴとしては、ヒーラーの名家に生まれたのに力を持たず、目の前で怪我をした者がいるのに応急救置しか出来ないだなんて、恥でしかなかった。責められて当然の

ことだった。

しゅん、と下を向いていたリヴの頭が、ぱしっと何かに掴まれた。それがケルの大きな手だと気づいたのは、その大きな手がバスケットボールを握るかのように、リヴの頭をぐっと握って上向かされてからだった。

無理やり上を向かされたリヴの顔には、憎憎しげに自分を睨みつける男の顔。やはり、ヒーラーでないリヴなど怒りの対象になるのだろうか。

「このブス！」

突如投げかけられた言葉に、リヴは混乱した。

「はっ？」

「つまんねーこと言いやがって。ほんとブスだな！」

「な、なによ！　なによブスって！」

美人揃いのリスト家に生まれて、特別美人だとは思っていないけれど、ブスと言われるほど酷い顔だと思ったことは無い。そんなこと、今日始めてあったこの男に言われたくない。

「ブスだからブスって言ってんだよ！　お前、何勘違いしてんだ？　自分が上手くいかないこと全部、ヒーラーじゃないとか偽リストとかのせいにしてるだろ！」

「なっ！　……！」

一瞬怒りが湧いたが、リヴはすぐ押し黙る。痛いところを突かれた。言われてみれば、そうなのかもしれない、という考えが頭によぎる。ケルは続ける。

「ハッ！　なっさけねえな。初めてあった不良の俺にこんなこと

言われて、何も言い返せねえのかよ！　偽リストだ？　お前のあだ名はブス！　ブスで十分！」

ブス！と言い放つと同時に、ケルの手が乱暴にリヴの頭から離れた。リヴは後ろにつんのめりそうになりながら、何とか体制を立て直す。

「な、なによ！」

すでに歩いて向こうの方に行っているケルに向かって叫ぶと、ケルはニヤリと笑いながら振り向いた。

「悔しかったらアタッカー専攻して、俺を負かしてみろよ。ま、その気取った鼻っ柱へし折って、こてんぱんにのしてやるけどな！　じゃあな、ブース！」

ハハハと笑いながら去っていく失礼な男の背中を睨みつけながら、リヴは怒りにぶるぶると震えた。

「なによ…なによアイツ！　アイツ！！　なんて失礼な奴なの！！！」

しばらくその場で悪態をついていたリヴは、ぶんと勢い良く振り向くと、どしんどしんと足音をたてながらどこかへ向かっていく。すれ違った何人かの学生が、リヴのあまりの剣幕に驚いて振り向いたが、そんなことなど気にならなかった。あつという間にリヴ担当の治癒魔法の教授の部屋に着いたリヴは、紅茶のカップを片手に驚きに固まる教授の執務机に、どん！と勢い良く両手を突いた。

「教授！ 専攻を変更いたしますわ！ わたくし、わたくしアタツカーになります！」

はじめての

おさらいしよう。

アタッカーとは、アタック、つまり攻撃的行為を主に担う兵のことである。

通常の兵は皆、剣や魔術などの攻撃手段を持っているが、アタッカーと呼ばれる兵たちの攻撃力はずば抜けている。防御魔法や回復、陽動魔法などは他の兵に任せて、とにかく相手へ与えるダメージを大きくすることに重きを置いている。戦場の花形だ。治癒魔法を主とするリスト家の人間で、アタッカーになった者は誰も居ない。

淡い水色の髪と瞳、という、完全にリスト家を体言する容姿のリヴは、居心地の悪さを感じながらも講義の場である練習場に来ていた。同じ講義を受ける学生たちのうち、育ちの悪そうな、つまり不良っぽい男たちが修練場の端で大きな笑い声を上げていた。アタッカーを専攻している同級生。つまり、リヴの進路を変える決定的なあの日に出会った、あのお下品な男達だ。

その中に、ケル・ロアを見つけた。筋肉質で大きな体の彼は、不良たちの中心人物のようで、彼が何かおどけた様子でしゃべると、周りの者がワハハと下品な笑い声をあげて彼を小突いている。

リヴは、子供っぽくて嫌な感じだと思い彼らに冷たい視線を送ると、はた、とそのケル本人と目があった。驚いてぷいっと視線を逸らすと、周りにいた男たちがニヤリと意地悪に笑ってケルに何か言う。どうせ、リスト家のヒーラー？ いやいやあれが偽リスト、とか何とか言ってるんでしょう、とリヴは半ば諦めたようにふんつと息をついた。

先日から始まった一年生の後期。リヴは専攻を治癒魔術師から、攻

撃的術師に変更した。

今日は初の実技演習の講義。担当はケイン教授ではない。アタッカー専門のケルたちや、アタッカーとまではいかないが、攻撃魔法を主に使おうという他の学生達も居る。そこまで攻撃に特化していない講義である。

練習場に教授が入ってきた。講義が始まるのである。学生達は番号順に整列し、教授から今日の注意事項と指示を受けた。

「では最後に纏めですが、この講義では二人一組でペアを組み、連携することに重きを置きます。では、ペアを組んでください。」

途端にわいわいと学生達がざわめきだす。皆、気の合う者同士でペアを組み、教授のところへかけて行き名簿に記入している。リヴには寂しいことに、アタッカーの親しい者などいない。偽リストとして一線を引かれているので、積極的にこちらから「私と組みませんか？」と行くこともしない方が良いだろう。適当に人数であぶれた誰かと組もうと周りを見回す。

右を見て、左を見て、そして後ろを振り向くと、大きな影がそこにあった。身長差でリヴの視界には相手の胸しか見えなかった。

「おいお前。俺と組もうぜ。」

(……この声は。)

嫌な予感がして、ねっとりとした嫌味ったらしい視線で上を見上げると、予想通り、大柄で赤毛の人物がそこに居た。

「……どういうつもり？」

「はぁ？ 何だよ、ブスのお前と組んでくれる奴なんて誰もいねえだろうから、俺が組んでやるって言ってんだよ。」

「…………失礼な人。結構ですわ。」

ふいっとリヴはそっぽを向く。この人を負かそうと思って専攻を変えたのだ。一緒に組むなんてもってのほかだ。

と、ケルがリヴに話しかけている様子を見ていた他の女子学生が、くすくすと笑った。

「ちょっとケル。その子偽リストでヒーラーじゃないわよ！」
とたんにどっと周りの学生たちが笑う。

「…っ！」

こういう下品なものたちに何度も傷つけられてきたリヴは、カチンときた。しかし、言い返す言葉も見つからない。偽リストでヒーラーじゃない。それは本当のことだからだ。本当のことだから、こうやって専攻を変えたのだから。

そのとき、リヴの目の前の男があきれたように、大きな声をあげた。
「はあ？ お前バカか？ アタッカーの講義にヒーラーが来るわけねーだろ！ しかもアタッカー同士で組んで連携しろって言われているのに、何で俺がヒーラーを選ぶと思うんだよ。」

笑っていた女子学生が、言い返されたことに忌々しそうに唇を噛んだ。

リヴは目を丸くして言葉を失う。何なのだこのケル・ロアという男は。意地悪で嫌な奴だと思ったのに、急に味方してくるなんて、調子が狂ってしまう。

ケルは何事もなかったかのように、リヴに視線を戻した。

「おーい、リヴ・リン。お前氷魔法が得意なんだろう？ 俺は土魔法、植物系と体術が得意だ。俺と組もうぜ。」

絶句してケル・ロアの顔を見る。からかいに来たのだと思ったのに、本気でペアに誘いに来てくれたのか。信じられない。だって自分は偽リストだ。

どうやら睨んでるように見えたらしく、ケル・ロアが唇を尖らせて、

勝手に語りだす。

「いやさ、俺もバフォーエン家の養子だから偽バフォーエンなんだよね。そういわれるの嫌だから、家名なしのケル・ロアで通してるんだよ。お前もそうしろよ、リヴ・リン。」

「リヴ・リン？」

勝手に家名を外して呼ばれて、リヴは悪い気がしなかった。

家名の関係ないリヴ、という一人の人間になった初めての瞬間、なのかもしれない。色々な気持ちがごちゃまぜになって黙ったままのリヴに、ケル・ロアはぷいっと顔を背けて、ぶっきらぼうに

「おい、リヴ・リン！ 俺と組むのか組まないのか、どっちだよ！」と大声で叫んだ。

「はぁ！ や、ちょっと何なの！？」

「この俺様が誘ってやってるんだ、いいから組めよ！」

ケルの大声に、取り巻きの周りの男たちがドッと笑ったので、リヴは真っ赤になって狼狽して、早くやめるとばかりに叫んだ。

「わかった、わかったから！ 組みますからやめてちようだい！」

70点

攻撃的魔術の連携の講義が終わった。

ケルと並んで教授のところへ行くと、教授から今日の評価を点数化されたプリントを手渡される。ケルが受け取って見ているのだが、背の高いケルが自分の顔の前にプリントを持っていたってしまったので、リヴには内容が全く見えない。

「ちょ、ちょっと見せて、見せなさいよ！」

専攻を変えて始めての実技だっただけに、リヴは結果が気になって仕方が無い。

評価の書かれたプリントを取ろうと、両手を挙げて振り回す。

「あーまで、までって。」

ニヤニヤと笑いながら、ケルが大きな手でリヴの頭を押さえつける。

「ちょっと！ 乙女の頭を抑えるなんて、失礼ですわ！」

「きゃんきゃんうるせーブスだな。」

「ブスって言わないで！」

「ブスにブスって言って何が悪い。」

プリントを見ながらケルに簡単にあしらわれて、リヴは悔しさを隠し切れない。

「よかったな、ブス。まあまあみたいだぞ？」

ようやくプリントがリヴの目の前に下りてきた。リヴはぶん取るようにケルの手からプリントを奪い取り、貪るように文字に目を走らせる。

「えっ？ …あら？」

興奮しすぎて、中々内容が頭に入ってこない。何度も何度も見直して、5回目の見直しでようやく内容が頭に入ってきた。

「…70、点？」

70点…。じんわりとその点数が、リヴの中に染み込んでくる。ぽわ、と頬が赤くなる。

点数にしたら大喜びするほどの点数ではない。現にケルの方は、ほぼ100点に近い点数だ。

しかし、治癒魔法が0点だから劣等感を感じていたリヴにとって、かなり驚くべきことだったのだ。その70点の殆どをペアとなった男、ケル・ロアのフォローが担っていたことは承知している。それでも、それでもリヴは嬉しくて、頬を赤くしたまま、プリントを抱きしめてにっこりと微笑んだ。

間抜けにも、この意地悪な男の前で、にっこりと無防備な顔を見せてしまった。

「うわ、ブスの間抜け顔。」

そういわれてはたと自分の状況に気づき、慌てて両手でゆるんだ頬を押さえる。

「うう…うるさいわね！ いいじゃないの、私がどんな顔をしよう
と！」

赤くなったり笑ったり怒ったり、今日のリヴは忙しい。つい恥ずかしさのあまり、憎まれ口を叩いた。

「まあ、お前、なかなかじゃん。」

ケルにそう返されて、リヴは面食らった。まさか褒められるなんて思っていなかった。

ええ？とか声にならぬ声をあげていると、わらわらとケルの仲間も集まってきた。

ケルのようにバシバシとリヴの頭を叩く。

「偽リストやるな」

「お前まじでアタッカー専攻しろよ。」

「ケルさんのペアに丁度良いんじゃないやねえ？」

「ケルさんのペア、キツツイぜ。」

「いや、意外にイケてたことね？」

熱気むんむんの男たちに取り囲まれて、やいのやいのと会話され、リヴは動揺した。

「えっ、あ、ありがとうございます。」

苦手な部類の人たちに好意的に受け入れられていることに驚き、礼を述べながら小さく会釈すると。

「おいお前ら！」

ケルが大きな声で一同を制した。男たちが口を閉じてケルに注目する。

「偽リストとか言うんじゃないよ。こいつはリヴ・リンだ。」

リヴの顔が赤くなる。おお、と男たちがざわめいた後、リヴ・リンさん、リヴさんと自分のことを呼び始めたので、さらにうろたえる。

「リヴ、お前まじでアタッカー目指せよ。んで、俺と組まねえ？」
リスト家のヒーラーは、必ず誰かとペアになる。ヒーラーでないリヴに、ペアが出来るなんて考えたこともなかった。リヴは少しドキドキしながら、そっけなく答える。

「…べつにいいですよ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1894ba/>

氷の華の咲く場所は

2012年1月14日17時55分発行